原著論文

自我と脳

ー高次脳機能障害者の手記を手がかりにー

The Self and Its Brain

ーCentered around a higher brain dysfunctional person's notesー

福岡大学大学院　　中野　桂子

Graduate School of Fukuoka University　　NAKANO　Keiko

Abstract:

This paper aims to clarify the meaning of the Self and its brain in the notes of a higher brain dysfunctional person, Kikuko Yamada.

Yamada writes that "my brain does not forget me", "my brain does not easily forget who I am". Moreover, Yamada names the frontal lobe(Zentoyou)　"Miss Frontal (Zenkochan)".

Why does Yamada says that "I am brain, and brain is myself"？ Does Yamada take concreteness(self) for abstraction (brain) by confusion？ Yamada's sentence is so strange that we can not understand its meaning.

But Yamada writes the relation between self and brain in Japanese culture. In this culture, all beings are living. So that, mind is living in not only animal, plant, but also matters such as stone, tool, water, and so on. Therefore, they are able to be called by the name of a proper noun of person.

In Yamada's sentence, brain as a matter is changed into brain living in actual life, that is Self. Yamada says "there is a function looking down at my appearance and action from a high place, or a function of taking an objective view of them in human brain". And then, Yamada says "a higher brain dysfunctional person knows who and what he or she is. To know who and what I am is the Self's ability". Self is a function that is able to leave from her situation and see it.

Yamada's Self is both I and a third party, or the public personality who is born from "social experience".

Abstract: 高次脳機能障害者（higher brain dysfunctional person）、自我（self）、脳（brain）

はじめに

この研究は、高次脳機能障害者である山田規畝子の手記を手がかりにして、自我と脳の意味を明らかにする。いうまでもなく、手記は個人の経験の記述であるが、これを対象にしたのは、ここから学ぶことがありうると見たからである。けだし、Jaspers が語ったように、「人間は互いにひどくちがっている、しかも全ての人間は共通のものをもっている、ということが経験の示す二つの面である」[1)]からである。この経験から、人間にとって意味あるものを紡ぐことができるはずである。

山田は、24 歳（東京女子医科大学六年生）、34 歳（山田整形外科病院院長）、37 歳（病院勤務医師）と三度にわたる脳内出血によって、視覚失認、短期の記憶障害、左半側空間無視、けいれん発作などの障害を負っている。けれども、山田は「高次脳機能障害者は自分が誰なのかちゃんと覚えている人間である」[2]と語っている。さらに、山田はこうも語っている。「脳は自分が誰であるかを、簡単には忘れたりはしません」[3]「脳には学ぶ力がある」[4]「脳は自分を忘れたりしない」[5]「自分の脳との対話のすすめ」[6]と。なお、山田は語っている。「老人の認知症などと違い、高次脳機能障害では自分が何者かを覚えているケースが多く、新しい脳皮質の理にかなった記憶と、感情の原始的な記憶など古い皮質の雑多な種類の記憶を整理し、それを説明する言語というツールを使って必要に応じて再生する役をしているのが、私が『前子ちゃん』と名付けた理性的な脳の機能ではないかと感じています」[7]。山田は、「前子ちゃん」についてこうも語っている。「そのうち私は、私を助けに出てくる『もうひとりの私』が脳の中に息づいていることを感じるようになった。 たとえば、突き指を予防するのは『不用意に手を突き出さない』ことを意識する注意力で、これは理性に通じるもの、いわゆる前頭葉の働きではないかと私は解釈している。 そういう意味で『もうひとりの私』を、私は『前子(ぜんこ)ちゃん』と命名した。前頭葉(ぜんとうよう)の『前』に、もうひとりの私も女性だろうから『子』をつけて前子ちゃん。前子ちゃんが『ほら、急に手を出さないで。まずそっと手探りしてごらんなさい』と私に注意を喚起(かんき)してくれるから、突き指は防げる」[8]。「この前頭前野は、私のリハビリの伴侶(はんりょ)のような存在で、私にとって自分の分身のようにとても親密なものなので、私はそれを『前子ちゃん』と呼んでいるのだ」[9]。

山田が語ることは、主体である山田自身が脳であるようにも、別のものであるようにも読みとれる。山田は語っている。「脳の機能に障害のある人たちは、まず自分自身が自分の障害をよく知ることが重要だと思っています。まずは自分が何ができないのかに気づき、できない現実の自分と向き合うことが、自分のことを客観的に見つめられる自分を確立することにつながります。これが自分自身の主体、自分そのものです。 私は、自分のこの主体を『前子ちゃん』と名づけていますが、この主体がしっかりとすることで、脳の機能の調子が悪い時でも自分の現実の状態を自覚することが容易になります。そして、社会生活が楽になると考えています」[10]。「自分の日々の暮らし、好きだったもの、生き甲斐(がい)。脳は簡単に忘れたりはしません。周囲の方、介護の方にお願いしたいのは、病気が本人に何か変わったことをさせたからといって、患者を別の人のように扱わないでほしいということです。『まるで人が違うようだ』とか言わないでほしいのです。この人は、間違いなく『自分』であり続けています。心の中は何も変わらない、紛(まぎ)れもない自分です。これまで生きてきた自分と、なんら変わりはないのです」[11]。山田は、くりかえし語る。「この前子ちゃんという機能は、まさに人間として特徴的な、理性という脳の機能であるようだ」「複数のことを、一度に、自分が何をしているのかをはっきり記憶しながら行うということは、健常者であれば何の苦もなく脳が勝手にやりこなしている行動である。しかし脳に傷を持った患者さんではそれがうまくいかなくなることがあり、脳の持ち主の自分が、脳になり代わって意識することでやりこなさなくてはならないことも起こる」[12]。

ここでも、山田は、脳を医学の対象であるかのように見ながら、他方では、自分自身のことであるかのように語っている。これは何を意味しているのか。本研究は、障害者にとって自我と脳が、いかなる意味をもっているのかを明らかにする。

1. 出口のない問い

山田が語る自我と脳を明らかにするため、まず、自我と脳に関する探求を素描することにする。自我と脳に関する問いは、神経生理学の発展とともに

に生じたものであったが、ちなみに脳外科学の権威と称されてきたPenfieldは、心と脳について、こう語っていた。「意識あるいは心が脳のどこかに局在すると考えるのは誤りである」[13]「私は何らかの結論から始めることなく、最終的で変更の余地のない結論で終わることもしなかった。私はただ、現在までに得られている神経生理学上の証拠を、二つの仮説、すなわち人間は一つの基本要素から成るという説と、二つの基本要素から成るという説に照らして再検討してみただけなのだ。私は、私達が一生懸命に働かせている脳の仕組みは、これら二つの説のいずれかに従って役目を果たしているものと考える。そして私の結論はこうである――刺激電極の使用、意識のある患者の研究、てんかん発作の分析などの新しい方法によっても、心の働きはすべて脳の仕組みに帰するという十分な証拠はない。私は、人間は二つの基本要素から成ると考えた方が一つの基本要素から成ると考えるよりも理解しやすいと結論する」[14]。Penfieldは、脳と心とを分離した方が、それぞれの働きや仕組みを理解しやすいと見て、脳と心の二元的見方を採ったのである。したがって、人間の自発的な意志ないし意識によっても脳は働くのであり、それは電気刺激という電気的エネルギーによらない別の力、すなわち心で治められていると解したのである。

Penfieldのような二元的見方は、PopperとEcclesの共同執筆である『自我と脳』にも見ることができる。哲学者のPopperは、こう語っていた。「進化論的な観点から、私は自己意識的な心を大脳の創発的な所産とみなします」[15]。ところが、Popperは、「大脳の創発的な所産」について、こう語っている。「さて、強調したいのは、心は大脳の創発的な所産であるということだけでは、ほとんど何も言われていないのと同じだという点です。それは実際には何の説明価値ももたないし、ヒトの進化のある地点に疑問符を置く以上のことは示していません」[16]。ウィーン学団の哲学的分析に資したPopperは、それ以上の発言を控えている。他方、現代を代表する脳神経生理学者のEcclesは次のように語っている。「私の立場はこうです。私の個人的な独自性、すなわち私自身が理解する自己意識は、私自身の自我の誕生についてこの創発的所産では説明されない、と信じています」[17]。「私は、私の独自の自己意識的な心、または私の独自の自我性、または魂の、超自然的起源と呼ばれるものが存在することを信じないわけにはいきません」。では、「どのようにして私の魂は進化的起源をもつ私の大脳と連結するようになるのか」。「自我や魂の独立した起源についての仮説を要求するのは、経験された自我の独自性であり、そのあと自我や魂は大脳と結びつき、私の大脳となるのです」[18]。Ecclesによれば、自我が自らの起源についての仮説をつくり出すのであって、この自我が大脳と結びついたのである。したがって、自我あるいは魂は、「受胎と生誕の間のどこかの時点で胎児に植えつけられる」[19]のである。Ecclesもまた、自我と脳の二元論に立っているのである。

Popperと同じように、哲学的分析の発展に寄与していたRussellは、こう語っている。「私がこの論文で手がけたいことは、精神と脳髄との関係をいずれの存在をも含まない言葉で述べなおすことである」[20]。それは、こういうことである。「感覚が本質的に関係的でない出来事であるとすれば（if sensations are occurrences which are not essentially relational）、心的出来事と物理的出来事（mental and physical occurrences）とを基本的に違ったものとして見る必要はない。精神も一片の物質も決定的には違っておらず、ときには、現実に同じ素材からつくられた論理的構成（logical construction）と見ることが可能になる」[21]。「感覚が本質的に関係的でない出来事であるとすれば」とは、ひとつの主観がひとつの客観を感覚するという主体と客体の関係を消去するならばとの謂である。この仮定的観点に立てば、「生理学者が脳の中にある物質と見ているものがまさしく思想や感情から成っている」[22]のである。ゆえに、「脳の中にある物質を見ている」ということは、生理学者の心の中の出来事である。かくしてRussellは語る。「生きている脳をつくっている出来事は、それに

対応している精神をつくっている出来事とまさしく同じであるということに私も同意する」[23]。

Russell は、精神と脳髄、自我と脳、心と物質、意識と身体を出来事という概念によって統合したというのである。すなわち、「世界は変化した状態をもつものからではなく出来事から成っている（the world is composed of events）」[24]。それゆえ、精神と物質とが世界を構成しているのではない。出来事が世界を構成しているのであって、精神も物質も出来事の位相ないし在り様なのである。換言すれば、「精神と物質との相違は、それを構成している素材にあるのではなくまとめ方にある」[25]。したがって、「重要な点は、精神と物質の相異は質の相違ではなく配列の相違だということである」[26]。このことを Russell は住所録にたとえて語っている。つまり、精神と物質とは、人びとの住所が一方では地域別に、他方ではアルファベット順に配列されているようなものである。それゆえ、精神と物質とは、それぞれに独立した存在であるとか、相互に関係し合っているとかいうのではない。それはまさに不可分かつ同一の出来事を表わしているのである。但し、Russell はあくまで仮定的観点に立っているのであって、その妥当性が明証されているわけではない。

ところが、このような探求に対して Whitehead は終止符を打つことになる。Whitehead によれば、二元的見方は、17 世紀、Descartes 以来の科学の図式に依拠しているのであって、それは意味のないことであった。すなわち、「哲学は三つの極の間で複雑な動き方をしてきた。物質と精神を同等の基盤に立つものとして受けいれる二元論者たちがあり、また精神を物質の中に置くものと物質を精神のなかにおくものとの、二種類の一元論者たちがある。」しかし、Whitehead は、それを「抽象観念の手品まがいのもてあそび」であって、これは、「具体的なものの取り違い（misplaced concreteness）」、すなわち「具体性と置き違える誤謬」[27]であるとしたのである。けだし、この誤謬は哲学が、科学が発見した事実を信仰にも近い心意で信じ、それを具体かつ現実のものと見たところから生まれたからである。すなわち、科学が見出した脳という抽象的概念を具体的なものと取り違えたとき混乱が生じるのである。具体的なものは現に、いま、ここを生きている自我としての私である。

2. 生きる自我

それでは、山田が「前頭葉の前子ちゃん」「脳は自分を忘れたりしない」というとき、Whitehead がいう具体的なものの取り違えをしているのであるか。山田は、医学者として、脳の中に自我を解消しているのであるか。ところが、山田は「生命の神秘」と言い、「神秘の脳」[28]と語っている。山田が神秘ということばを使ったとき、それは科学の知が支配する世界を離れている。「私の脳は壊れています。でもいつかは元の姿に戻ろうと頑張ってくれているに違いありません」[29]。「脳は自分を忘れたりしない」[30]「自分の脳との対話」[31]「『死』について考える私」[32]「『脳の中のもうひとりの私』、そして『今の私』」[33]「脳の持ち主の自分が、脳になり代わって意識することでやりこなさなくてはならないことも起こる」[34]などとあるとき、山田は、あくまで生きている自分を語っているのである。山田が脳を語るときにも脳を自分に転換して語っているのであって、この脳は医師としての山田が生理学で知った脳と同一ではない。山田は、いつの間にか、自然に、気づかないうちに、生理学上の脳を生きられる脳、生きる自我へと転換しているのである。

山田にとって、自分及び自分が記した脳と生理学における脳とは別のものであったのである。それゆえ、山田は「脳は脳を忘れたりしない」「脳と脳との対話」とか「死について考える脳」「脳のなかのもうひとりの脳」「脳の持ち主の脳」「脳の分身、前頭前野の『前子ちゃん』」などとは決して言わないのである。山田が語る文法は、生理学上の脳と自分、つまり、それ（it）としての脳と私とが別のものであることを語っている。もし、山田

が、両者の区別ができなくなって、「私は脳である」とか「脳は私である」ということを無条件に受け容れているとすれば、山田は現実を生きていないのである。それは、「〝私がみつかりました〟とビニール袋に尿を容れて持ってくる者、下痢をして〝自分が流れていっちゃった〟と極度の不安に陥る者」[35]など、統合失調症に見られるように、自我の没落である。脳は多様かつ多義的述語作用をもちえない。他者に対しても物に対しても、脳は一義的であって、脳においては、自分のことばが成り立たないのである。自我としての私、あるいは自分こそがあらゆる述語作用を可能にし、物語を織ることができる。それゆえ、考える、決断する、愛する、悲しむ、希望する、知る、これらの述語作用は、脳ではなく私を主語として生まれるのである。私はあなたを愛しているというが、脳はあなたを愛しているなどとは決して言わないのである。

山田は、「脳の持ち主の自分」という。他ならぬ私が、身体、手や足をもっているように、「私が脳をもっている」というのである。だが、私は身体をもっているが、同時に身体は私に転換されて私は身体であるということができる。それゆえ、脳もまた身体であって、私の分身たりうるのである。したがって、「私の分身、前頭前野の『前子ちゃん』」という。前頭前野も他ならぬ「私の分身」、すなわち私である身を分けたものである。であるから、このように語られている時の脳は身である。そもそも身は中身、切身、生き身、身様、身丈、身振り、人身、身内、分身と言うように多義的であって、自身、御身、身共のように「さまざまな人称的位置をとる」[36]ものでもある。ちなみに、かつては、思考や感情は、脳だけではなく、身体のすべてにあったのである。それは、腹がすわる、腹を探る、腹に一物がある、腹を割る、胸に聞く、胸がさわぐ、胸に畳む、手をつくす、手にとるように分かる、など枚挙にいとまがない。したがって、自我としての自分は、不随意に動く身体に在りながら、事に応じて随意的に働くことができる身体を生きている。この身体は世界の中にあって、世界に関わっている。それゆえ、生きることは、私が身体であることである。かくして、私、すなわち自分であって身である自身は、あらゆる述語作用が収斂する場で、他者と共に生きることのできる存在であったのである。

山田は、時間の内に在って生きられる存在、すなわち世界に関わる存在として語るとき、自分、私ということばを語ったのである。まさに、「死について考える私」とはそのような意味で語られたのである。また山田が、「脳は自分を忘れたりしない」というときには、自分のもっている脳を第三人称として、客観的に見て、語っているのではなく、脳を身に転換して、身である私自身として語っているのである。私である自身としての脳には過去の記憶が物語になって保持され続けている。この記憶は電子機器に記憶されたものとは異質のものである。脳には、山田という一人の人間の過去の経験が記録されていて、その同一性は失われていないということである。山田は、純粋に知的に処理された客体としての脳、ひとつの生理的な事実を自分と称し、「脳は自分を忘れたりしない」と語ったわけではないのである。

3. ことばの文化

それにしても、なぜ、「脳は自分を忘れたりしない」のような文が現われるのか。ここで問われるのは、自我と客観化された生理学的脳の関係ではなく、その語られた意味である。まず、西洋の文法であれば、「前頭葉の前子ちゃん」といった句や「脳は私を忘れたりしない」といった命題は成立しないであろう。日本語の「頭が痛い」は西洋では、「I have a headache」か「There is a headache in me」であって、そこには必ず主体としての私がある。「Head has an ache」とか「Head is an ache」などありえようもないのである。もちろん、「Brain does not forget me」などもありえようもないのである。

「脳は自分を忘れたりしない」には、脳が独立した人格のように自分(I)として表明されている。これは脳の人格化である。前頭前野の働きを「前子ちゃん」と称したように、その働きが人格化されているのである。これは、あたかも宇宙探索機「はやぶさ」をはやぶさ君と称して、独立した人格のように見ることと同じである。わが国の文化は、神道及び仏教的文化の気圏にあって、ここでは物体をも生者のように見るところがある。そもそも、もの(者)、生きもの、化けもの、もののけ、もの(知識)知り、物、もの(言葉)をいう、とあるように、これらは「もの」というカテゴリーに入るのである。しかも、山田は「人間が日常的に心の中で繰り返す言葉たちがあるから、人間は前に向かって進める」[37]という。「言葉たち」は人称を現わしており、このことばが、「もの」を者あらしめるのである。それゆえ、わが国においては、『ねずみの嫁入り』や『さるかに合戦』『つるの恩がえし』などの昔話が生まれる。ここでは壁や臼などの物やつるやへびといった動物が人の心をもって活躍するのである。他方、キリスト教の聖書が神と人間とを結びつけ、人間と他の存在とを区別した文化をもつ西洋では、人間が動物に変身することはあっても、動物が人間になることはない。そのためか、わが国のように物と人の相互が自在に交流することがないので、物体に人の名まえをつけることはない。もちろん、欧米の宇宙船などに航海者(Voyager)、冒険者(Adventurer)、ユリシーズ(Ulysses)、アポロ(Apollo)といった名まえがつけられたとしても、それはひとつの記号に近いものであって、そのことによって宇宙船が人間の心をもった、人間に親しいものと見られることはないのである。

山田は、自分の前頭前野に「前子ちゃん」という名を付けたのであったが、生理学上の器官としての脳に名まえをつけることは、山田にとっては何のこだわりもなかったのである。それは、一般の健常な人にも何気なしに受け容れられるのである。こうして、「『名』が付くと、それぞれのものは、語の意味的形象的差異によって、相互差異的に自己同一性を得る」[38]のである。さらに、人の名まえがつけられることによって、その器官は、曖昧模糊ないし混沌から、かたちを得て現われ、生きたものとなり、私に対峙し、私と語り合う者となる。山田はこのように脳を人称化することによって、脳をいつくしみ、睦まじくし、励まし、それを傷つけるものに対して、同盟し、戦うことになるのである。この時、脳は、「自分の脳との対話」とあるように、対話が可能な自我として屹立し、「われ－それ(Ich－Es)」から「われ－なんじ(Ich－Du)」[39]の関係としての「あなた」になっているのである。すなわち、この脳は、「脳の中のもうひとりの私」というように、私に対峙する存在なのである。これは、山田の作為でも、ごまかしでもなく、日本の文化のなかで高次脳機能障害者がひたすら生きることから自ずと生まれたものである。

4. 視点としての自我

山田規畝子が脳にこだわるのは、高次脳機能障害をもつ者として当然なのである。しかも脳は自我の働きと密接な関わりがある身体の部位であるので、脳の障害によって生じる不安と恐怖の深さは測りがたい。そのため医師である山田は脳を科学的に見ようとしている。障害が脳のどこにあるかを知ることは、治・領(し)ること[40]、すなわち治めるであって、医師として自分ではどうすることもできないとしても、それだけで心に落ち着きを得るのである。けだし、何はともあれ、脳の障害の部位を見きわめ、それをことばにすることは、これを同一的なものとして保存することであり、いつのまにか、それを力である知によって操作することを可能にするからである。しかし、どれほど脳の障害の部位及びその機能を知り、自分と脳との関係を明らかにしたとしても、これだけでは生きる力にはならない。山田はある時点で、

脳を生きる力に転換したのである。これを可能にしたのは日本の文化を生きる山田の人格ないし自我のダイナミクスである。

山田が、「心の芯に『自分が誰で、どういう人間か』ということをしっかり見つけています」[41]「脳は自分を忘れたりしない」というのは、人格としての自分である脳の可能性を信じていることを語っているのであり、そのことは、畢竟、自分自身への信頼と希望を失わずに生きることを表明しているのである。山田は語っている。「もう私にとってはどうでもいい場面ですが、たくさんのシーンが記憶装置に残っているのを感じます。そういう場面のどれもが私の歴史で、私の人生であったことを感じたりするのです。記憶は、自分が真剣に取り組んだものほど技術や知識が壊れずに残り、その人の歩いてきた人生を如実にあらわします。そういう自分の足あとをずっと残しておいて、時々見せてくれるのも脳なのです。自分がまさに自分である証拠は脳が持っているわけで、もうそれは自分で一生、持っていくものです」[42]。さらに山田は語る。「人間の脳には、自分の姿ややっていることを高いところから俯瞰するように見渡す機能、つまり客観視する機能があります」[43]。それは、「自分を高いところから見守るような客観的な理性のようなもの」[44]であると。ここで語られている脳は、もはや、生理学上の脳ではなく人格としての自我である。この自我について、Mollenhauer は的確な解釈を与えていた。すなわち「自我とは、身体と心の外にあって、そこからこの両者を『見』、あるいは知覚しあるいは経験することができるような位置である。なぜなら私は明らかに『私自身』を、私の身体の『内的生活』を観察し、これについて他者に伝達することができるのだから、と。したがって、少なくとも次のようには言えるだろう。私――身体やその内的生活の外部にある――がそれであるところのこの第三者、私が第三者であるのは、『視点として』である。そもそもこの視点から見て始めて、生きものとしての私が身体と心という二重の存在様式において存在するということも私に対して現われてくるのだ。この限りでは、厳密にいえば『私（Ich＝自我）』は私の外にある、つまり脱中心的である」[45]。

Mollenhauer と同様なことを Langeveld は取り上げ、脱中心的な働きである自我を人格と称している。「人間の自己は複雑な力動的統一であります。それは、あらゆる局面における彼の彼自身に対する関係において、また、彼にとってさまざまな意味をもつところの仲間たちに対する彼の関係において、あるいは、価値と価値の経験に対する彼の関係において、さらに彼のこれまでの生活歴、彼のこれから先の予想、彼の現在の生活状況との取組み方に対する彼の関係において、露わとなる力動的な統一の姿なのであります。『自己』は、この意味で、当の人格のとる位置に関わる相であると言うことができましょう」[46]。かくして山田が語る脳、自分、私という一連のことばは、心身の外に位置して、そこから見る視点、すなわち見る働きであったのである。「自分の日々の暮らし、好きだったもの、生き甲斐。脳は簡単に忘れたりはしません」というのも、この脳とは心身を脱し、離れて見る働きとしての自我である。この自我はたんにいま、ここに在る心身を見るだけではない。見ることは、状況、すなわち意味としての空間と時間の座標軸において見ることである。自我は、見ることによって過去から現在に至り、さらに未来へ向かう力なのである。山田は語る。「病気をすると、いつもよりいろいろなことを考えます。それはある意味、自分の脳との対話です。過去のこと。考えていたこと。未来のこと。家族のこと。友達のこと。楽しかったこと。つらかったこと。『ああ、こういう私なんだなあ』という発見も気づきもあって、私にとってはとても興味深かったのです。　まだ私には何十年かの人生があると思うのですが、私の脳が教えてくれた『これがあんただ』という自分を、四〇歳を過ぎた頃から、なんだかとても愛せる気がしているのです」[47]。山田は、この見る働きとしての脳を愛し、感謝の気持ちを語っている。もちろん、この脳は自我である。これは、たんなる自己愛あるいは自我愛の如きものではない。子どもや思春期の若者に見られ

るような、自己愛や自我愛は自分だけのことを思い、自分だけが大事にされることを望むという点で他者依存的であるが、山田がいう愛は、生きている自分へのいたわりといつくしみ、感謝の謂であって、他者に愛を求めているのではない。山田の自我は、子どもの自我ではなく、すでに成熟した人格としての自我に達している。

5. 生かされる自我

もちろん、このような自我は山田だけにあるのではない。人は自分の心身に対して愛や感謝を抱くことができる。「長い間働いてくれた身体を休ませてあげねば」「手足をいたわらなければ」と人は語る。「丈夫な身体に感謝して生きている」などとも言う。このとき、身体や手足は、生きて、自我に向き合うものとなっている。したがって、身体や手足にも脳に対するのと同じように、愛と感謝を抱くことができる。それは、脳とひとしく、身体や手足が自我と共にある生きた他者となっているからである。これらは、いずれも自分であって自分でない他者なのである。なぜなら、原初的に見れば身体は、親から、あるいは超自然的神仏か何かによって与えられたものであって、自分が創り出したものではないからである。それゆえ、自分に与えられた身体に対する感謝は、与えてくれた者に対する感謝である。ここで自我はもうひとりの自我を見ているのである。脳を愛し、身体を愛し、これらに感謝するということは、そこに他者を見ることである。かくて、脳や身体と自我との関わりが新たに問われることになる。この関係はもはや、客観化された生理学的な脳や身体と自我の関係ではなく、自我としての脳ないし私が生きる身体と自我との関係である。もちろんこの関係は、子どもや精神の病いや認知症の人たちの自我ではなく、成熟した人格としての自我によって生まれている。自我はすでに他者によって育まれ、形成されながら、自ら形成する力を得た自我である。よってこの自我は、他者の思いやりや愛の関与から萌えでている。したがって、自我は同時に他者との関わりにおいて生まれ、生かされ、かつ他者と共に生きる働きである。このことについて山田は、こう語っている。「若い高次脳機能障害者も『私には前子ちゃんがいないんです』と言っていましたが、それは社会経験が充分ではなかったためです」[48]。「それは、『前子ちゃん』が私自身なら、その実体は他ならぬ私の経験が人生の中でつくってきた力であるはずで、『前子ちゃん』は私の脳の『履歴』であろうということである」[49]。もちろん、ここでいう経験とは認識論上の経験ではなく、他者と共に生きる経験である。山田が語る脳は生きる自我でありながら、同時に他者に生かされている自我である。ちなみに、母子家庭の山田は、幼い一人息子との対話を記している。「障害をもった時期が子育ての時期にあたる女性の場合、とても重い問題です。……私の場合、一人息子を育てる苦労というよりも、まず私の人生の上での大きな決断をしなければならない時に、それも大きなものをあきらめる決断をしなければならなかった時に、それでも私に残される大きな価値として彼がいてくれたことの意味のほうが大きいと思います。『病気はしかたないよ。生きていてくれるだけでいいよ』と言ってくれた幼い息子の言葉を聞いて、たとえ多くのことをあきらめても、それでも自分の生きている意味だけはなくならないのだという勇気が得られたのです。生きていないといけないのは、生きていると喜んでくれる人がいるからです」[50]。さらに山田は語っている。「『生きてやる』という強い一念とはまた別に、自分が『生かされている』という実感がわくようにもなってきたのです」[51]と。山田の脳はこのような生きることの謂をもっていたのである。

むすび

山田規畝子が自分の心の中に現われるもう一人の自分を前頭前野の前子ちゃんと名づけたと

き、それは自我を前頭前野の中において解釈したのではなかった。哲学及び脳神経生理学が問い続けてきた自我と脳の問題は、山田においては、現実を生きることのなかで意味がないのであって、山田の脳は現実を生きる自我へと転換されている。これは、抽象的な脳から生きる自我への止揚である。このことは、高次脳機能障害を生きる山田にとっては必然的なことであった。生きるということは抽象から脱して現実を歩むことであるからである。もちろん、現実を歩むとは状況、すなわち「人がその中で行動しなければならない人間の諸経験の複合体」[52]いわば「人間の世界に対する人間の直接的な関係」[53]を生きることである。自我は状況の経験から形成され、そこで、生成されるのである。それゆえ、自我は他者と関わることのできる、脱中心的な位置に立つのである。すなわち、山田が語る自我は、人格すなわち心身の状態を離れた位置から見る働きであって、その位置とは、脱中心、他者との共存的視点であったのである。山田は、このような第三者の視点から自分に起こる心身の状態を見ることによって自己創造を進めている。山田が「脳には学ぶ力がある」とか「壊れた脳も学習する」としたのは、見る視点としての自我が学ぶ力、すなわち自己創造であることを語っているのである。

山田の発言は、科学の対象であったそれ（It）としての脳が自我に転換され、人間一人ひとりの現実の止揚されることを示したのであったが、これは人間の可能性の発見であり、生きる者の希望である。もちろん、この転換がどのようにして可能になるのか。このことは、医学、心理学、のみならず、言語、文化、宗教といった広大な気圏への問いを誘うのである。新たな探求が求められる所以がここにある。

注

1) Karl Jaspers, Idee der Universität, Springer-Verlag, 1952.『大学の理念』森昭訳、理想社、1972、p.187。

2) 山田規畝子『壊れた脳も学習する』角川学芸出版、2011、p.41。

3) 山田規畝子、同書、p.135。

4) 山田規畝子『壊れた脳　生存する知』角川学芸出版、2009、p.17。

5) 山田規畝子、『壊れた脳も学習する』前掲書、p.134。

6) 山田規畝子、同書、p.235。

7) 山田規畝子、同書、p.85。

8) 山田規畝子、『壊れた脳　生存する知』前掲書、pp.113-114。

9) 山田規畝子、同書、p.280。

10) 山田規畝子、『壊れた脳も学習する』前掲書、p.135。

11) 山田規畝子、同書、pp.135-136。

12) 山田規畝子『壊れかけた記憶、持続する自我』中央法規出版、2011、p.56。

13) Wilder Penfield, The Mystery of the Mind, A Critical Study of Consciousness and the Human Brain, Princeton University Press, 1975.『脳と心の正体』塚田裕三・山河宏共訳、文化放送出版部、1978、p.177。

14) Penfield、同上書、p.182。

15) Karl R.Popper & John C.Eccles, The Self and Its Brain, 1977.『自我と脳』西脇与作訳、思索社、1986、p.787。

16) Popper and Eccles、同訳書、p.787。

17) Popper and Eccles、同訳書、p.794。

18) Popper and Eccles、同訳書、p.795。

19) John C.Eccles, Evolution of the Brain, Creation of the Self, 1989.『脳の進化』伊藤正男訳、東京大学出版会、1990、p.264。

20) Bertrand Russell, Portraits from Memory and Other Essays, Gerge Allen and Unwin, London, 1956, p.135。

21) Bertrand Russell, My Philosophical Development, George Allen & Unwin, London, 1959, p.139。

22) Russell、ibid.、p.139。

23) Bertrand Russell, Portraits from Memory and Other Essays, op.cit., p.147。

24) Russell、ibid.、p.149。

25) Russell、ibid.、p.148。

26) Russell、ibid.、p.148。

27) Alfred North Whitehead, Science and the Modern World,

Cambridge, 1953, p.70。
28) 山田規畝子、『壊れた脳　生存する知』前掲書、p.214。
29) 山田規畝子『高次脳機能障害者の世界』協同医書出版社、2009、p. ii 。
30) 山田規畝子、『壊れた脳も学習する』前掲書、p.134。
31) 山田規畝子、同書、pp.236-237。
32) 山田規畝子、同書、p.67。
33) 山田規畝子、『壊れた脳　生存する知』前掲書、p.279。
34) 山田規畝子、『壊れかけた記憶、持続する自我』前掲書、p.56。
35) 渡辺哲夫『知覚の呪縛』西田書店、1986、p.121。
36) 市川浩『＜身＞の構造』青土社、1984、p.39.
37) 山田規畝子、『壊れた脳　生存する知』前掲書、p.141。
38) 井筒俊彦『意識の形而上学――「大乗起信論」の哲学』中央公論社、1993、p.190。
39) Martin Buber, Ich und Du, 1923, Werke 1 Bd., Schriften zur Philosophie, Kösel Verlag, Verlag Lambert Schneider, 1962, p.79。
40) 松村明監修『大辞泉』小学館、1998、p.1358。
坂部恵『「ふれる」ことの哲学』岩波書店、1983、p.32。
41) 山田規畝子、『壊れた脳も学習する』前掲書、p.135。
42) 山田規畝子、同書、p.236。
43) 山田規畝子、同書、p.235。
44) 山田規畝子、同書、p.175。
45) Klaus Mollenhauer, Vergessene Zusammenhänge, Über Kultur und Erziehung, Juventa Verlag, Weinheim und München, 1985.『忘れられた連関　＜教える－学ぶ＞とは何か』今井康雄訳、みすず書房、1987、pp.30-31。
46) M.J.Langeveld, Self-development.『教育と人間の省察』岡田渥美・和田修二監訳、玉川大学出版部、1976、p.35。
47) 山田規畝子、『壊れた脳も学習する』前掲書、pp.236-237。
48) 山田規畝子、同書、p.239。
49) 山田規畝子、『壊れた脳　生存する知』前掲書、p.298。
50) 山田規畝子、『高次脳機能障害者の世界』前掲書、p.128。
51) 山田規畝子、同書、p.138。
52) M.J.Langeveld, Some Recent Developments in the Philosophy of Education in Europe.『教育の理論と現実』和田修二監訳、未来社、1972、p.137。
53) M.J.Langeveld, Anthropologie und Psychologie der Erziehers.『教育の人間学的考察』和田修二訳、未来社、1973、p.142。